

ノルウェーの保育事情

西 村 重 稀*

*仁愛大学人間生活学部

Day Care Centers in Norway

Shigeki NISHIMURA*

*Faculty of Human Life, Jin-ai University

本研究は2009年7月6日から2009年7月11日までノルウェーのオスロで第11回ヨーロッパ心理学会が開催された時、オスロの公立保育所〔ノルウェー語で Barnehave (バルネハーゲ)〕を訪問し、園長や文献等からの情報をもとに、○ノルウェーの少子化の動向と次世代育成支援について ○ノルウェーの教育の概要 ○ノルウェーの保育施設の3つの視点からまとめたものである。特に保育施設については保育施設の概要、保育内容、保育施設の職員、保育施設の現状、保育施設への助成、オスロのバルネハーゲ（保育施設）を視察し、まとめたものである。

ノルウェーは男女共同参画が進み、かつ女性の社会進出が進んでいる国である。しかし、合計特殊出生率は日本に比べて高く、1.9を超えている。

次世代育成支援策については児童手当や育児休業制度の促進、男性の育児参加のための制度の充実等を図っているが、バルネハーゲ（保育施設）の待機児童は多く、バルネハーゲ（保育施設）の施設整備を官民挙げて促進している。施設の定員は60名から90名程度で日本のように200名を超える大規模な施設は少ない。バルネハーゲ（保育施設）は幼稚園機能と保育所機能を併せてもつ幼保一元化であり、国の所管は子ども家庭省である。保育内容も教育とケアである。また、オンブズマン制度が良く発達した国である。

キーワード 男女共同参画社会、育児休業等の充実、保育施設法、待機児童、
幼保一元化、ケアと教育

はじめに

ノルウェーは（ノルウェー語で Kongeriket Norge）スカンジナビア半島の西海岸にほぼ南北に細長く伸びている国であり、半島の約40%を占めている。面積は日本よりわずかであるが大きい。また、北極海及びノルウェー海に面し、フィヨルドが発達している。2008年のノルウェーの人口は4,812,000人（日本の人口の約4%）で、県は19カ所、市町村は435カ所がある。

気候は湿潤大陸性気候であり、高緯度にあるため、日照時間は夏の18時間から冬の6時間まで、変化の幅

が広い。しかし、北極圏に近いわりには、メキシコ湾流が南から暖かい海水を運んでくるため、オスロの気候は比較的温暖であるが、東部の内陸では寒暖の差が激しく冬の最低気温はマイナス50度にも達する。

ノルウェーはロシア、サウジアラビアに次ぐ世界第3の原油輸出国であり、ノルウェーの輸出の約35%を占めており、福祉国家としての財政に大きく寄与している。更に、将来の石油・原油の枯渇に備えて、原油の売上げによる収益は原則として「政府年金基金」として積み立てられ、国際的な金融市場に投資されている。また、水資源が多く、水力発電も活発に行われて

おり、漁業、林業、鉱業も盛んである。そのほか、特殊船舶の製造や船舶用通信機や海運等も盛んである。

1人当たりのGDP（国内総生産）や平均寿命、就学率、成人識字率ともに世界的に高く、人間開発指数「HDI（Wikipedia）」では、世界のトップクラスに位置している。

住民はゲルマン系ノルウェー人がほとんどであるが、そのほか、イラン、ユーゴスラビア、イラク、パキスタン、ソマリア人などの移民人である。公用語はノルウェー語である。宗教はルーテル派福音教会に、国民の約95%が属する。ヴァイキング時代にはブリテン島への遠征や襲撃を行ったこともあった。

1387年からデンマークやスウェーデンに支配されていたが、1814年に独立した。

オスロはノルウェーの首都で、人口は2008年7月現在で約568,800人（ノルウェーの人口の約11.8%を占めている）であり、ここ数年の人口は1年間で約1万人ずつ増え続けている。（出生数の増加と地方からの流入）

このオスロという地名の由来は、オスロの中心部にあった最古の牧場の名前であるという説があるが定かでない。ノルウェー鉄道のオスロシティホールの前には人間の5倍くらい大きな虎の彫刻がある。以前は、オスロはとても寒く、危険な都市であったため「虎の都市」と名付けられ、オスロの街の創立1000年の記念として、この虎の像が創設された。



写真1 オスロの虎

1 少子化の動向と次世代育成支援について

日本では、少子化が年々進行し、ここ数年の合計特殊出生率は1.3台である。ノルウェーの合計特殊出生率は1960年が約2.9であったが、日本と同じように年々低下し、1981年から1985年は1.6台と低い状態が続いた。

しかし、女性の社会進出が進んだにもかかわらず1980年の後半から上昇に転じて2006年には合計特殊出生率が1.9前後まで回復している。

ノルウェーは女性の就業率がヨーロッパの中で最も高い国である。また、国会議員の約36%が女性で占められており、男女共同参画も進んでいる。

2002年のデータによると、25歳から66歳の男性の就業率は86.3%であるに対して、女性の就業率は77.7%である。小さな子どもを持ちながら働いている女性も多い。1965年には小さな子どもを持つ母親は、10人中9人が専業主婦であったが、今日では状況がほぼ逆転して、就労している主婦が多い。そのため、近年では、福祉制度等の充実や家事・育児と仕事が両立できるような次世代育成支援策が進んでいる。

育児に対する経済的支援であるが、働く女性が出産する時の休暇は産前12週間、産後6週間の合計18週間あり、出産手当も国民保険から出産前の賃金の80%又は100%が支給されている。父親についても出産休暇があり、出産前後の2週間が取れる。（しかし、父親の場合は無休になる）

育児休暇については、3歳未満児の子どもを持つ親が取得できる。ただし、出産後1年間は両親が分割し

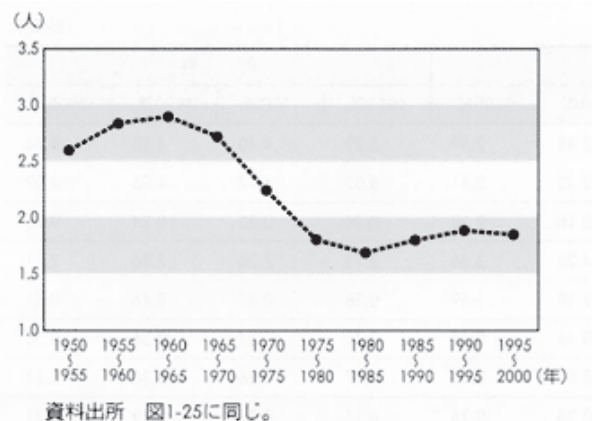


図1 ノルウェーの合計特殊出生率の推移
（ノルウェー統計局の資料より）

て取得し、残りの2年間は母親が1年間、父親が1年間で合計3年間である。休業手当は企業の負担はなく、産前、産後を加えて54週間の休業以前の給与の80%が企業からでなく国民保険から支給される。(給与の100%の支給を求めた場合には44週間に短縮される。)

また、「パパ・クォータ制度」が実施されている。(世界で最初に導入)。これは、父親が有給で一定期間生まれたばかりの子どもと家庭で過ごす育児休暇の取得義務付けをした育児休暇制度である。ノルウェーは女性の社会進出が進んでいるため男性にも育児の義務を課せるために作られた制度である。父親がこのパパ・クォータ制を取らないと育児手当がかなり減額することで、実質義務的の制度に近いことから父親も育児休業を取り育児に積極的に参加するなど、子育ての責任を夫婦が負う家庭が多くなった。

また、母乳を与える母親には1日に1時間(無給)であるが、休暇を取る権利が保障されている。育児休暇の2年間は母親がパートタイムとして働く制度の「時間振り替え」と呼ばれる制度がある。

その他、子どもと家庭で過ごすことを選択された両親には外で働く人と同じだけの年金の点数を確保する権利が保障されている。

児童手当は18歳未満の児童1人当たり月972ノルウェークローネ(約1万5千円程度)が支給される。

北欧諸国ではオンブズマン制度が良く発達しているが、ノルウェーでは子どもや家族が生き生きと生活することを進めるために1981年に世界で初めての「子どもオンブズマン法」(18歳未満の子ども達の権利を守るために、特別に監察官を置く制度)が制定された。

また、ノルウェーが世界で初めて、1978年に「男女平等法(Gender Equality Act)」が成立した翌年に男女平等法が推進されているかどうか監視するために「男女平等オンブズマン」制度を設置した。そして、公務員や公的機関などによって女性の権利や利益が損なわれないようにするために立法府が任命する行政監察官をおいた。

しかし、家事においてはまだ日本の父親と同じように女性に不公平な面が見られる。例えば、男性の家事の仕事は車の手入れ、電機製品の修理などが中心で時間のかかる日常の家事は依然と女性が行っている。そ

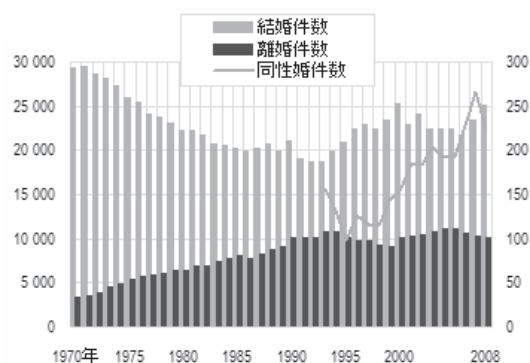


図2 結婚・離婚件数の推移
(ノルウェーの統計局の資料より)

のため、女性は社会進出が進む一方、日本と同じように家事と仕事の二重の責任を今までと同じように負っている。このことによって女性側から離婚の申し立てが出されるため、ノルウェーでは離婚率が高い。

1980年代にはノルウェー家庭の約20%が一人親家庭になり、そのうち90%が母子家庭であったため、一人親家庭の政策にも力がいれられた。

一方、多様化する保育ニーズに対応するため、様々なタイプの保育施設がある。日本のような認可保育所は2001年には5,776カ所(公立保育所2,978カ所、民間2,798カ所)のほか、両親が保育に参加できる「オープン・デイケアセンター」と呼ばれる開放型の保育所(2001年5,826カ所)や保育士資格を持つ人が責任者となって個人家庭で行う「家庭託児所(日本においてこれに類似するのは家庭的保育)」などがある。

2 ノルウェーの教育の概要

ノルウェーでは普通教育を定めた「教育法」があり、この教育法は日本の学制より130年も早く、1739年に公布された。これによってノルウェーの子どもは7歳に小学校に入学して基礎的な教育を受けることができた。その結果、1800年までにはすべてのノルウェー人は読み書きができたと言われている。1997年には教育法が改正され、義務教育の入学年齢が6歳に引き下げられた。同時に義務教育期間も6歳から16歳までの10年間に定められた。6歳からの第1学年から第4学年までは下級小学校(lower primary)、第5学年から第7学年までは上級小学校(upper primary)、第8

学年から第10学年は下級中学校 (lower secondary) に区切られている。

小学校の第1学年から第4学年の子どもを対象とした授業前および授業後のデイケア (日本では放課後健全育成事業にあたる) は435カ所の市町村に義務づけられている。そこでは、遊び、文化的活動、レクリエーションなどを実施している。

小・中学校の段階は基礎教育であり、義務教育である。そして、市町村が実施主体になっている。その後、日本の高校教育にあたる後期中等教育があり、これは3年間である。この後期中等教育は義務教育でないが県が実施主体になっており、ほぼすべての子ども達が入学しており、授業料は無料である。

後期中等教育を卒業すると大学等の高等教育を受ける。しかし、高等教育を受ける人は約25%程度に減少するが、男性より女性の進学率が1990年代より増加し、2007年では、女性が約27%、男性は25%を切っている状況である。

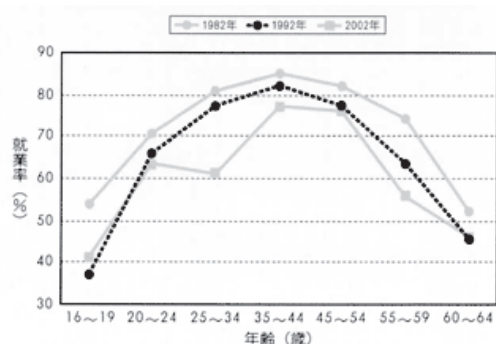


図3 男女の高等教育への就学率の推移
(ノルウェーの統計局の資料より)

しかし、社会人になってから学校教育以外の成人教育コースを受講する人は多く、約50万の人々が受講している。

3 ノルウェーの保育施設 (保育所)

(1) 保育施設の概要

現在のノルウェーの認可保育施設はバルネハーゲ (barnehage) と言い、就学前教育に位置づけられている。そして、子ども家庭省 (the Ministry of Fam-

ily Affairs) が所管し、市町村が実施主体となっている。日本のように幼稚園・保育所・認定こども園と区分しないで幼稚園と保育所が一元化された施設である。

バルネハーゲ (保育施設) は福祉的・社会的役割を果たすための保育所としての機能ともう一つは教育的な役割を果たすための幼稚園的機能を持っている。

日本においては幼保一元化について賛否両論があるがノルウェーにおいても過去に、バルネハーゲ (保育施設) は教育施設であるべきか、児童福祉施設であるべきかと論議されたが、両方の機能を持たせた施設であるということに落ち着き、現在に至っている。

ノルウェーには児童福祉を推進する法律として児童福祉法 (the Child Welfare Act) がある。この法律はすべての自治体が児童福祉サービスを提供することを位置づけている。この法律の目的は健康や発達にとって有害と思われる環境 (虐待など要保護を必要とする家庭、子どもにとって有害な環境の地域) に住む児童や青少年が適切な時期に必要な援助やケアを受けられるようにすることや安全な環境で養育されるように援助することであると記載されている。バルネハーゲ (保育施設) もその目的のための一つの施設であると定義されている。

しかし、1975年に保育施設法 (the barnehage Act) という法律が成立し、施行されたため保育施設はこの法律に従い実施している。

この法律によってプリスクールティーチャー (pre-school teacher) の資格を持った教員が配置され、または、何らかの形で関わり、その教員がバルネハーゲ (保育施設) における教育の内容に対して責任を負うことになった。

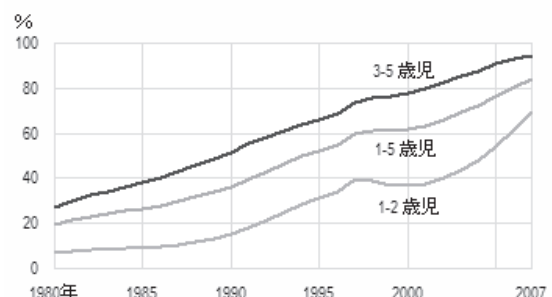


図4 1歳から2歳児、3歳以上児、1歳から5歳児の入所率の推移 (ノルウェーの統計局の資料より)

バルネハーゲ(保育施設)の入所児童については1980年では、1歳から5歳児の約20%であったが、2000年では約63%、2007年では約84%を超えている。

ノルウェーの就学時期は9月であるため、6歳に年齢が達しても9月にならないと小学校には入学できない。ノルウェーの就学前教育は教育とケア(日本では養護という)を一体的に提供するという伝統がある。日本のように幼稚園と保育所があり、それぞれを所管する文部科学省と厚生労働省とに分けるというような制度ではない。ノルウェーの認可されたバルネハーゲ(保育施設)は、すべて子ども家庭省の所管となっている。

そのため、ノルウェーの就学前教育は、英語では一般的に「Early Childhood Education and Care」と言われている。

ノルウェーでは認可されたバルネハーゲ(保育施設)はすべて教育とケアとを一体的に行っており、先ほども述べたように「子ども家庭省」によって管轄されている。そして、市町村はバルネハーゲ(保育施設)の認可、保育の実施等を行っている。

バルネハーゲ(保育施設)には市町村が創設した公立施設と会社組織や私的な組織が設立し、運営する民間施設がある。

そのほか、認可されているファミリー・デイケア(family day care)、保護者と一緒に自由に訪れることのできるオープン保育施設(open barnehave)がある。特に、近年、ノルウェーにおいても共働きする家庭の増加で、バルネハーゲ(保育施設)の待機児童が多くなり、オスロなどの大きな都市ではバルネハーゲ(保育施設)の整備が盛んである。しかし、日本と同じように待機の間は、オープン保育施設やファミリー・デイケア等に入所して、バルネハーゲ(保育施設)の認可保育施設の入所を待っている。(一人親家庭の場合は優先的に入所ができる。また、国籍がない外国人においてもバルネハーゲに入所できる。)

このバルネハーゲ(保育施設)の認可基準等については「保育施設法」で定められている。

この保育所施設法では、バルネハーゲ(保育施設)の目的、認可基準、その運営基準、指導監督基準、自治体や保育所の設置者の果たすべき役割、保育者の役

割、保育の質に関わる条件などの保育所の基本的な事項が規定されている。

バルネハーゲ(保育施設)の認可面積基準は3歳未満児は1人あたり4,5㎡、3歳以上児は1人あたり3,5㎡、職員の配置基準は原則3歳未満は、児童9人に対してプリスクールティーチャー(Educated preschool teacher)かチャイルド・マインダー(child-minder)のうち1人は必ず配置され、さらに2名の助手が配置されている。そして、3歳児以上の場合にも同様に、18人の児童に対して必ず1人はプリスクールティーチャーが配置され、2名の助手が配置されていなければならないと規定されている。しかし、保育所において満足のできる教育活動のできる職員数が配置されていれば良いとなっている。これらのことは、バルネハーゲ(保育施設)の設置者にある程度の裁量が任されている。

しかし、もし、職員の数が少なく保育活動が十分でない場合には監督責任のある市町村が改善するように命じることができる。また、保育施設の運営に当たっては地域の人や保護者の代表、議員等が関わり、運営などを話し合う。これはバルネハーゲの運営においてもオンブズマンと同じような役割を導入している。

私が視察したオスロの保育施設では、各クラスに1人の常勤のプリスクールティーチャーと助手が2人配置されていた。

日本における保育所の面積や人の設置基準は、児童福祉施設最低基準において規定されているが、3歳未満児においても、3歳以上児においても日本の保育所の面積基準より広く、職員の配置基準においても無資格者を含めると1歳から2歳児の職員の配置については、日本の場合は6人の児童に対して保育者(保育士資格者でないといけない)1人が基準となっているが、ノルウェーでは児童9人について職員3人(助手も含める)と日本の職員の配置基準より職員が多く配置されている。また、3歳以上児についても、日本の職員配置基準では3歳児の場合は20人の児童に対して、保育士資格取得者が1名、4歳以上児は30人の児童に対して保育士資格取得者が1名となっているが、ノルウェーでは、3歳以上児であれば18人の児童に対して、職員が3名(無資格も含めると)配置されており、日

本の職員配置よりも多く配置されている。

そのほか認可となるために、①保育活動は定期的で、最小限、児童の過半数が週20時間以上通って来ること。②同じ時間に3歳以上児は10人以上、3歳未満児は5人以上いなくてはならない。③所長は金銭の事務をしなくてはならないなどが規定されている。

（2）保育施設の保育内容

保育内容については「保育施設法」で定められており、「就学前教育は教育とケアを一体的に行うこと」や「保育施設は子ども達の家族との間の密接な理解と協力関係の中で、子ども達に発達や活動のための健全な機会を提供すべきこと」などと定めている。

日本の保育所の保育内容は児童福祉施設最低基準第35条で保育の内容は厚生労働大臣が定めた保育所保育指針によることになっている。この保育所保育指針の第1章の総則、2の保育所の役割の（2）において、「保育所はその目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭と密接な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護および教育を一体的に行うことを特性としている」と規定されている。

これらのことを比較すると、日本もノルウェーも保育内容については、保護者と協力して実施するなど、日本の保育所の保育内容と基本的な違いはないのではないかと考えられる。

ノルウェーではこの保育施設法において保育内容のナショナルカリキュラムが1996年に作成され、すべての保育所ではそれぞれの地方の状況を考慮しながらナショナルカリキュラム（日本の保育所保育指針にあたる）に沿って保育を展開している。また、市町村は所管の保育施設を監督する必要上、各保育施設の年間指導計画とともにその評価のプログラムや結果等について提出させている。

バルネハーゲ（保育施設）での指導計画については、子どものケア、遊びを通しての社会性、知的な発達、身体的な発達・技能などが保証されるように作成されている。これは日本の幼児教育の目標である自発的・主体的に関わりながら直接的・具体的な遊びの体験を通して、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など

を身につけることに相当するものであると思われる。

そして、そのためのねらいと内容を幼児の発達の側面からまとめて「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域を定めている。

同様にノルウェーにおいても5領域を定めているが、①身体的活動、健康。②自然、環境、テクノロジー。③社会、宗教、倫理。④言語、聖書の句、コミュニケーション。⑤美的な諸領域である。ただし、この保育施設法の保育内容の基準は地域での自由な判断で新しい試みなども導入することができるようになっている。

また、日本の新しい保育所保育指針によると、小学校との連携において、児童保育要録を作成して送付することなど以前より、連携強化を行い、幼稚園・保育所から小学校へと子どもの発達の連続性を図っている。しかし、ノルウェーにおいては小学校の第1学年ではプリスクールの教育方法に基づき、遊びと、混合年齢での活動を重視してバルネハーゲ（保育施設）における保育との連続性を図っている。

（3）保育施設の職員

バルネハーゲ（保育施設）での指導計画はプリスクールティーチャーが作成する。また、園長になるためには、公立であろうと、民間であろうと同じようにプリスクールティーチャーの資格を持っていないとされない。園長は教員の代表と言うことと施設の設置者の代理でもあるため、施設の運営・管理の責任の他に、スタッフの指導にも責任を負っている。

園長以下のプリスクールティーチャーは自分が担当しているクラスの指導計画の作成や保育についての責任、子どもの親たちとの連携や支援、教育実習生の指導の責任などがある。

この保育施設の中核となるプリスクールティーチャーの養成は3年以上の大学等で養成されている。

しかし、先ほども記述したがノルウェーでは女性の社会進出が目覚ましくバルネハーゲ（保育施設）が足らなくて、施設設備の整備を進めているが、それに伴うプリスクールティーチャーの養成も不足している。

そのため、現在のプリスクールティーチャーの養成だけでは保育者の数が不足するため、各市町村では独自の養成コースでの養成や無資格者の任用を行ってい

る。この人達は臨時免許のプリスクールティーチャーや見習いなどと呼ばれている。現在、ノルウェーのバルネハーゲ（保育施設）では、正式なプリスクールティーチャーの資格を持つ保育者は全体の3分の1程度であり、近年の就学前の急速な入所希望の増加には追いついていけない状況である。

この要因としては日本と同じように、小学校教員に比べてバルネハーゲ（保育施設）のスタッフの給料、労働条件、社会的な地位などが劣っているためであると言われている。特に、ノルウェー政府は2000年までにバルネハーゲ（保育施設）で働く男性スタッフの割合を20%まで引き上げる目標を立てたが、2000年の男性スタッフはプリスクールティーチャーの全体の約6.6%にとどまっている。

（４）保育施設の現状

バルネハーゲ（保育施設）は教育的機能を持っており、就学前教育という位置づけがあるが、日本と同じように義務教育ではない。また、育児休業制度の充実のため0歳児が保育施設に入所することはほとんどない。

ノルウェーでは1歳から2歳の児童を持つ保護者がバルネハーゲ（保育施設）に入所させない場合は子ども家庭省より手当が支給される。そして、バルネハーゲ（保育施設）に全時間預けていない場合には預けていない時間の割合でもって手当が支給されるという制度がある。

第5図は1歳と2歳児の児童手当支給状況を年ごとに示したグラフである。

1999年では1歳児の約79%が受給されていた。2歳

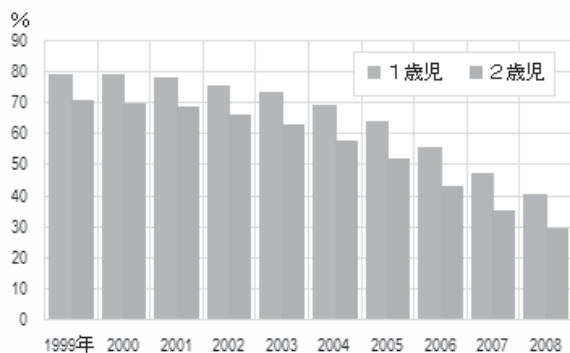


図5 1歳児と2歳児の児童手当の支給状況の推移
（ノルウェーの統計局の資料より）

児の場合には約70%が受給されていた。しかし、年々受給者が減少し、2008年では1歳児では約40%、2歳児では約30%と減少している。

このことは、年々1・2歳児とも手当の受給を受けないで、バルネハーゲ（保育施設）に入所させる傾向が強くなったためである。また、出生数がここ数年増加している。そのため、ノルウェーでは日本と同じように、バルネハーゲ（保育施設）等の整備を進めているが、待機児童が増加している。

バルネハーゲ（保育施設）の1才児から5才児の入所は1980年末の時点では約20%であったが、2007年には1歳児から5歳児の児童の約84%が認可されているバルネハーゲ（保育施設）に入所している。

バルネハーゲ（保育施設）のみの公私別で見ると、先ほども記載したが、2001年のデータで、全国5,776カ所のうち公立は2,978カ所（51.6%）、民間は2,798カ所（48.4%）であった。しかし、現在、待機児童のためにバルネハーゲ（保育施設）の整備を進めているが、これらの多くは公立であることから公立のバルネハーゲ（保育施設）が今後増加するものと思われる。

逆に、日本の場合には2002年から公立保育所の民営化が進んでおり、認可保育所は2009年4月現在で22,926カ所あるが、そのうちの約51%が民間保育所である。今後も民営化が進むと考えられる。このことは日本とノルウェーの国や地方公共団体の財政力の違いではないかと考えられる。

就園率は市町村で大きく異なっている。就園率が90%を超えているところもあれば30%程度のところもあるが、多くの市町村では50%から60%である。障害のある子どもは、日本と同じように公立のバルネハーゲ（保育施設）に入園しているのが多い。

（５）保育施設への助成

保育所の運営は、保護者からの保育料と国と市町村からの補助金で運営されている。認可を受けた保育施設は「年齢による子どもの数、子どもが通所する週あたりの時間の長さ」に従って、国および市町村から補助金が支給される。国からの補助に関しては、公立・私立の区別はないが、日本と同じように市町村では公立と私立の補助額は異なっている。国、市町村、保護

者の負担の割合は原則4:3:3である。しかし、私立保育施設の場合は保護者負担が高く、公私間でかなり差があるため、その格差の助成が求められている。

(6) オスロの保育施設の視察

オスロの中央駅から車で20分程度離れた Bloeler 73, 0691に設立されている公立のバルネハーゲ（保育施設）を視察した。

このバルネハーゲの名前はこの地名をとって Boeler barnehage と付けられた。この地域は中流家庭の人たちが住んでいる地域である。

入所児童は1歳児から5歳児で63名である。クラスは3歳以上児が3クラス（1クラス18名）、1歳児と2歳児のクラスが1カ所（1クラス9名）である。

職員はプリスクールティーチャー5人と助手8人、園長1人の計14名である。なお、掃除は委託業者に任せている。

保育料は応能負担方式であり、当バルネハーゲの入所児の保育料は400ノルウェークローネから2,500ノルウェークローネである。

当施設の開所時間は午前7時30分から午後5時までである。

1日のスケジュールであるが、登園時間は親の都合や子どもの体調などに合わせるなど自由に決めることが出来るため登園はバラバラである。昼食は午前12時頃で各クラスの横に設置されている簡単な調理器具等で作る。オープンサンドにバターを塗ったり、チーズをのせるなどの軽食である。

（日本のように厨房室などは無い。）

昼寝は1、2歳児は実施しているが3歳以上児は実施していない。

午前中は音楽、工作、絵本読みなどを行う。時には園庭で遊ぶ。

当施設は国の保育施設法に従っているが、特色として、言葉の訓練については音楽を取り入れて行っている。（外国人の子どもが多いため）また、保育施設法の中で自然を取り入れた保育を実施することになっているため、当バルネハーゲは近くの森の中（バルネハーゲから子どもが歩いて20分程度）にテントを張りここを拠点として1日中森の中で遊んでいる。子どもは先生が見えなくなるところには行かないことと、集まるように言われた時には直ちにテントの近くに集まるという簡単なルールしかない。森という自然の中で子ども達が遊ぶことは、豊かな感性や認識力、思考力及



写真3 当バルネハーゲ（保育施設）の園長（Mrs.Astlid Wenthe）当園の園長になってから5年目



写真2 視察施設の Boeler barnehage



写真4 保育室入り口



写真5 子ども達の下足箱
この下足箱は乾燥が出来る。



写真8 保育室の横に手洗い場と簡単な料理が出来る設備がある



写真6 1, 2歳児の保育室(定員9名)
時々年長の子どもが保育室に入り, 小さい子の世話をする。



写真9 昼寝用の3歳未満児の簡易ベット
1, 2歳児はこのベットを使用して昼食後午睡を行う。



写真7 3歳以上児の保育室(定員18名)
当バルネハーゲには3歳以上児の部屋が3室ある。



写真10 料理セットが設置してある。
3歳以上児のために料理セットが準備してある。



写真11 アイロン、ミシン等で遊ぶおもチャがある。3歳以上児のために洗濯等セットが準備してある。



写真14 園庭 約800㎡
冬は雪遊びが出来るように多少坂になっていたり、比較的広い空間である



写真12 子ども達の絵本などのある部屋



写真15 ブランコの下にはおがくずが置いてある。



写真13 子ども達が絵本を読んだり、お話を聞いたりする部屋



写真16 子どもが入れるような大きさの家が3個おいてある



写真17 当バルネハーゲ（保育施設）から歩いて約10分程度行くと森がある。



写真20 テントから約100mほど離れたところで遊んでいる子ども達



写真18 森の中にある当バルネハーゲ（保育施設）のテント（森の遊びの拠点）



写真19 テントの中

び表現力が養われる活動であるから大切にしている。最初の頃はいろいろと保護者からクレームもあったが、保護者に対して、自然の中での遊びで子ども達に何を育てられるか等について説明をした。その後、この活動の大切なことを保護者も理解をして、軽い擦り傷程度であれば特に問題としないようになった。

保育所の運営については保護者代表、保育士、市会議員等地域の人も参加して運営方針や評価等を検討する。（オンブズマン方式を導入）

ノルウェーでは7月1日から夏季休暇に入っており、当バルネハーゲ（保育施設）に登園してくる子ども達は約半数であった。しかし、職員は連続して休暇を取することは困難である。

最後に視察にあたり快く受けていただいた当バルネハーゲ（保育施設）の園長（Mrs.Astlid Wenthe）、職員の方及び視察のまとめにあたり、資料の提供などにご指導を頂きましたノルウェーの大使館の方に深く感謝を申し上げます。

引用先 URL など

- (1) 厚生労働省 2003～2004 海外情勢報告書 <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/04/index.html>
- (2) ノルウェーのデータ
<http://www.ssb.no/English/subjects/00/minifakta-en/jp/main-03.html.utf8>

参考文献

- (1) 山田敏 北欧福祉諸国の就学前教育 2007 明治図書出版
- (2) 岡沢憲芙 奥島孝康編 ノルウェーの経済 2008 早稲田大学出版
- (3) 村井誠人 奥島孝康編 ノルウェーの社会 2008 早稲田大学出版
- (4) 荒井冽 幼児教育への新しい地平線 1999 明治図書